

某発達センターにおける摂食・嚥下障害への対応

○久保田一見、高橋摩理*、富田かをり*、
向井美恵*、藤原 卓
長大医歯病・小児歯、*昭和大・歯・口腔衛生

【目的】

近年、障害児歯科においても、健常児と同様の疾病構造の変化が認められ、歯科医療のかかわりは、形態の回復から機能の回復へと変化しつつある。全国的に見ても、昭和大学をはじめ、各大学、各歯科医師会を中心に発達障害児の摂食・嚥下リハビリテーションのニーズに答える形で医療や種々の支援活動が始まっている。今回我々は、長崎県北部地区の某発達センターにおける摂食・嚥下外来立ち上げに関わったので、外来開設の経過とその内容について紹介する。

【摂食・嚥下外来概要】

1. 対象・肢体不自由児の集団療育のクラス全員。療育クラス以外の外来受診者のうち、担当者から指摘を受けたもの、また小児科外来受診時に希望があったもの。
 2. 指導日の流れ・事前ミーティング→指導→事後ミーティング・指導内容確認という流れで1日2ケース行い、最後に昼食時に全体のミーティングを行い自由に意見を出し合うこととした。
 3. 食事カルテ・家族指導ノート作成
 4. 事前の情報収集
 5. 現在までの指導状況
- 集団療育クラス: 初回の指導時に、スクリーニングとして集団療育クラスについて食事状況の評価を行なった(6名)。
- 外来: OTから依頼を受けた患児の指導(1名)を行った。

【考察】

1. この発達センターは小児科医師をはじめ、OT、PT、ST等各職種とも、摂食・嚥下リハビリテーションに対して熱心であり、協力が得やすく、各職種による連携がスムーズに行なわれた。ことに中心になるキーパーソン(当発達センターではPT)を置いたこと、また摂食・嚥下外来の前後に必ずミーティングを行うことにより、各職種との指導事項の確認がなされ、専門領域の連携がスムーズとなった。
2. 対象の子供たちは、早期より訓練等の療育支援が行なわれており、摂食機能の問題への介入も早期に行うことができた。

1歳6ヶ月歯科健診における卒乳児と未卒乳児のう蝕罹患に関する研究

○井手有三、立川義博*、西めぐみ*
野中和明**、緒方哲朗**

井手小児歯科医院(久留米市)、*佐賀整肢学園こども発達医療センター歯科、**九州大学大学院歯学部口腔保健推進学講座小児医学分野

【緒言・目的】母子精神衛生上好ましいという理由で、以前は1歳だった卒乳を遅らせる傾向にある。そうすると次は授乳カリエスの増大が危惧される。そこで今回、卒乳時期とう蝕罹患に関する調査を行った。

【対象および方法】久留米市の1歳6ヶ月歯科健診で、平成12年から昨年までの4年間に当院を受診した832名を対象として、アンケートならび歯科検診を行った。アンケートの回答から卒乳児と未卒乳児に分け、う蝕罹患状況、生活習慣等を比較検討した。

【結果】1) 卒乳児・未卒乳児の比較。

1歳6ヶ月から1歳11ヶ月までの全ての月齢群で、未卒乳児は卒乳児よりも高いう蝕罹患を示していた。

2) 母乳児・哺乳瓶児の比較。

未卒乳児の場合、哺乳瓶児に比べ母乳児の方がう蝕罹患傾向が高かった。

3) 口腔衛生状態による比較。

口腔衛生良好群では、卒乳児・未卒乳児に関わらず、極めて低いう蝕罹患状況を呈していた。

【考察】1) 卒乳時期を指導する場合、1歳6ヶ月以前が目標になることがわかった。

2) 母乳はう蝕にならないという学説があるが、これに反する結果となった。

3) 卒乳が遅れても、口腔内が清潔に保たれていれば、う蝕に罹患しないで済むことが判明した。